

これからの「食生活」について考えた

二年 小倉 果穂

きっと今と同じ食生活は何十年も維持できないのだらうな、と思っっている。実際に未来の食生活を支えるため、代替肉の開発などが行われている。一日一日の食事を大切に食べようと思うが、どう大切に食べたら良いのかが分からない。少ない量の食材を食べるのが良いのか、お菓子やアイスなどの娯楽的な食べ物を食べないことか、それとも環境に優しい物だけを食べたら良いのか……。この本を読んだ後に、自分の中で食事をどのように大切にしているかが明確になった。

この本には社会で問題となっていることについて作者の斎藤幸平さんが取材したり、体験したりして感じたことが書かれている。その中で私は、今の日本の食の変化について書かれている部分に興味を持った。

ある日、コオロギが食卓に登場した時を想像して欲しい。私は、厳しい食料危機に陥っ

たのだと思ひ、頑張って食べるのかな、と思
う。私はまだ一度もココロギを食べたこと
はない。ココロギには高タンパク質、低糖質、
不飽和脂肪酸が豊富、と書いてある。なぜ、
今まで食べなかったのだらうと不思議に思
た。このココロギの話から今まではありえな
いと思われていた物が数年後の食卓に当たり
前に出てくるかもしれないと思つた。今では
当たり前に食される納豆も、昔は食べられな
かつたが、食べやすい味に改良されたおかげ
で、私たちは美味しく食べている。改良に改
良を重ねれば今ではあり得ない物も将来美味
しく食べられるようになると思つた。将来自
分がコッパパピールのつまみにはココロギ
の甘辛炒めだな、と言つてゐる姿を想像した
くないが、そう言つてゐるかもしれない。で
も少し、未来の食も明らかかも、と思つた。
以前イベントで鹿肉の串焼きを食べた。そ
れまではジビエは臭みがあつて、硬い肉とい
うイメージがあつた。しかし食べてみると、

「臭みがなく、柔らかくて、鹿肉って美味し
いんだ。」とびっくりにした。最近、鹿が害獣と
して問題視されている。そのことを知った直
後は、鹿肉は美味しいからみんなが積極的に
食べれば良いと思っていた。だが、実際はそ
う簡単ではなかった。斎藤さんは、大量の鹿
が捕獲されそのまま廃棄されるという現状を
打開するため、「リソーシヤル」という会社
を立ち上げた三人の若者を取材した。その会
社では、鹿の捕獲、解体、販売を行っている
という。そのうちの一人は初めて解体作業を
した時、「涙が止まらなかった」と言ってい
る。斎藤さんは解体作業を実際に体験して、
「毎日鹿を捕獲、解体するのは『起業』とい
う華やかな響きとはまったく異なり、命と向
き合う地道な作業であつた」と述べる。確か
に、生き物の命をいただくということは、生
き物を殺さなければならぬ。もし、私が解
体作業を経験したとしたら、これから先何度
もその時の光景や動物のうめき声が頭をよぎ

ると思う。果たして本当に自分に「生き物を殺す」ことが出来るのだろうか。

また、消費者はたくさんいても、消費者の手に届くまでの過程に携わる人々が少ないと思っただ。よく考えると、普段スーパーで売られている鶏肉や豚肉、牛肉も誰かが解体してくれたものであることを忘れていた。表に見えないその仕事は過酷で辛いものだろうと思う。斎藤さんは「私たちが日々たくさんの肉を食べながら、家畜の現状を見ないでいるこ

とが「無関心」と言っている。「まるで生きた家畜が存在しないかのように」とも。何も悲しい思いをしなくても肉が買えるという現状が恐ろしいと思っただ。さらに、賞味期限が過ぎたものが次々とあたり前に捨てられる。やっていることは鹿の害獣駆除をしていることと同じなのに、命の重大さの捉え方に違いがある気がする。元々それらは生きていて、私たちが生きるために殺されたという考えをもっと強く感じていかなければならないと思

った。それは家畜や鹿だけでなく、コオロギや魚、全ての生き物にも言えることだ。

命をいただいているという責任感を持つこと。生き物やそれらを私たちの代わりにここまでまでの状態にしてくれた人に感謝をしながら食べる。これが食べ物を大切にするということだと思っただ。ジビエが、現代日本人の食卓の闇を可視化し、反省を迫る問題提起なのである。と斎藤さんは言う。実際に私たちが狩猟に行つて鹿を狩ったり、家畜を飼ったり

することは、現実的に難しい。しかし、この本を通してジビエや家畜の現状を知ること、食べ物に対する考えが大きく変わった。もし、スーパーで肉を買う時や、食卓で調理された美味しそうな肉を見た時、生きている状態の豚や牛や鶏の姿に思いを馳せることができた。誰もその肉を残そうとは思わなだらう。一人一人がそう思うことができたなら、食べ物を粗末にすることもなくなり、本当の意味で「生き物の命を大切にする」と言えると思う。

い ただ く 命 に 恩 い を 寄 せ 心 から っ た だ き
ま す と言 い た い 。